

令和 2 年 6 月 16 日現在

機関番号：24302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04216

研究課題名(和文)知的障害者の「関係性の変容としての自立」のプロセスの解明

研究課題名(英文) Study of the process of "independence as a change of social relationships" for people with learning disabilities

研究代表者

森口 弘美 (Moriguchi, Hiromi)

京都府立大学・公共政策学部・助教

研究者番号：10631898

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：障害者の自立の概念は、ADLの自立から自己決定による自立へと変化してきた。しかしながら、決定に関わる判断や意思表示に困難を抱える知的障害のある人の自立をどのようにとらえるべきかは、共通認識が確立されているとは言えない。本研究では、知的障害者の自立を、本人をとりまく多様な人たちとの関係性の変化として捉えるべきであるとの立場にたち、その具体的な変化のプロセスを明らかにすることを目的に取り組んだ。ミクロレベルでは福祉ホームに入居した障害のある人たちの観察、家族のインタビューを行った。またよりダイナミックに社会の中での関係性の変化を目指すインクルーシブリサーチについて探求的に考察を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

福祉ホームにおける関与観察とインタビュー調査をとおして、ホームに入居する前の家族との濃厚な関係性が、支援者との関係性、さらに支援者以外の多様な人たちとの関係性へと広がっていくプロセスを考察できた。一方で、関係性が広がってもなお家族にきわめて重要なケア役割が残されるケースもあることが明らかになった。インクルーシブリサーチについては、実践的な取り組みを行いながら社会関係について検討した。また国際的なネットワークづくりにつながったことも成果の一つである。エピソード記述については、研究方法の一つとして紹介する機会を持たほか、学会のセッションをとおしてこの方法論の可能性を議論できた。

研究成果の概要(英文)：The definition of independence of people with disabilities has changed from one related to ADL levels of independence to what is by self-determination. However, no common consensus has been established on how to understand the independence of people with severe intellectual disabilities who have difficulties to make their own decisions. The purpose of this study is to clarify the process of the independence of people with learning disabilities from a view that we should regard independence as changes of their relationships with various people around them. I observed people with disabilities who started living in a group home and interviewed their families. In addition, I conducted an exploratory study of inclusive research aiming to change social relationships more dynamically.

研究分野：社会福祉

キーワード：知的障害 自立 インクルージョン インクルーシブリサーチ エピソード記述

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

身体障害者の自立の概念が「身辺自立」および「職業的・経済的自立」から「自己決定」による自立へと転換が図られたが、決定に関わる判断や意思表示に困難をかかえる知的障害者の自立においては、「自己決定」による自立の概念をそのまま当てはめることができない。研究代表者は先行研究において、知的障害者の「親元からの自立」を親の語りをとおして分析することで、「関係性の変容として自立をとらえる視点」を提示した。しかしながら、親の語りのみを分析対象としていたことから、どのような支援や環境があると関係性の変化がもたらされるのかは明らかにできていなかった。また「関係性の変容」というとき、どのような変化が自立に向けて望ましい変化なのかを明らかにすることができなかった。

2. 研究の目的

障害のある本人にとって親元からの「離家」や学校からの「卒業」といった移行期は、家族や学校の先生といった限られた人間関係が、就労先や地域の人たちとの多様な関係性へと広がっていく時期である。そこで本研究ではこうした移行期に着目し、知的障害者と取り巻く人たちの関係性の変化のプロセスを考察・分析することで、自立に向けた望ましい変化がどのようなものなのか、また望ましい変化がもたらされるためにどのような支援や環境づくりが有効かを示したいと考えた。

3. 研究の方法

研究の方法としては次の3つの方法をとった。

「親元からの自立」に関する関与観察とインタビュー調査

設立されたばかりの福祉ホームをフィールドに、親元を離れて入居した障害のある人たちがどのような体験をしているのかを観察するフィールドワークを行った。当初はこのフィールドワークをエピソード記述を用いて考察する計画であったが、意図していた成果が得られないと判断し、研究の途中で別の方法による調査を追加することにした。追加した調査とは、障害のある本人へのインタビュー、本人も参加する形での支援者へのインタビューを行い、それら进行分析することである。

「学校から社会への移行」に関する実践的研究

知的障害者が研究のプロセスに参画していくインクルーシブリサーチに取り組むことで、知的障害者をとりまく社会的な関係性を考察することを試みた。インクルーシブリサーチはイギリスを中心に英語圏で近年急速に広がりを見せているが、日本では先行研究がほとんどない状況である。知的障害者が研究者と対等な立場で協働することで、本研究がめざす「関係性の変容」を検討することができると考え、海外とのネットワークも作りながら探索的に取り組んだ。

エピソード記述の方法論に関する検討

本研究は「関係性」を考察の対象とするが、関係性というのは客観的には捉えることが難しく、また言語化されたデータを客観的に分析するだけでは変化の本質を明らかにすることが難しい。そこで、観察やインタビュー調査、あるいは実践的な研究のなかで、研究者が主観的に感じたことの意味を深めるエピソード記述を用いながら、この方法論の可能性をも明らかにしたいと考えた。

4. 研究成果

「親元からの自立」に関する関与観察とインタビュー調査

家族へのインタビューは、研究への協力に合意が得られた3家族に対して、3年間にわたってそれぞれ5回行った。本人がホームに入居してから3年という期間のなかで、本人の変化や家族の変化を言語化するとともに、「本人がどのような状態になっていけば自立したと感ぜられるか」という投げかけをするという探索的なインタビューを行った。また、追加の調査として実施した本人と支援者へのインタビューにおいても同じような問いかけを行った。

こうした調査をとおして明らかになったことは、家族でも支援者でもない、対等な立場で付き合い合える人の存在の重要性であった。成長過程において家族と最も深い関係を維持してきた障害のある本人たちは、ホームに入居することで家族の代わりに支援者によるサポートを得て生活をするようになる。このとき家族の代わりとして支援者が存在するのではなく、家族とはまた異なる関係を支援者との間で構築していくことになる。家族との関係という一つの関係性のパターンに、もう一つ別の関係性のバリエーションが加わったと言える。しかしながら本人と支援者の関係は、支援を「する・される」という非対称的な関係であることは否めない。障害のある人の人生が障害のない人の人生と同じ程度の選択肢に満ちたものになるためには、さらに別のパターンである「対等な関係」が重要になると言える。

なお、居所の分離を果たし、支援者によるサポートを受けるようになってもお、健康や命に係わるケアを親が担い続けるケースもあり、この場合は「本人が自立した」と親が感じることは

極めて難しくなることが推測された。この点については、十分に考察することができなかつたため、次の研究課題として取り組みたいと考えている。

「学校から社会への移行」に関する実践的研究

知的障害者の高等教育機関として活動する福祉型専攻科の協力を得て、知的障害者が自分自身のことをリサーチする研究活動を実施した。そして、ここでの取り組みをヒントに知的障害者が講師となる「合理的配慮研修」のプログラムを作り、その後も年1回のペースではあるが、大学生に対して研修を行っている。また、この実践的研究を足がかりに、研究活動に関心を持ち始めた知的障害者が現れたことから、研究費の申請時点から本人が共同研究者として名前を連ねる本格的なインクルーシブリサーチに着手することができた。

こうした足元でのインクルーシブリサーチの試みと並行して、英国に情報収集に赴き、ネットワーク構築を図った。その結果、英国のオープンユニバーシティを拠点に知的障害者とのインクルーシブリサーチに取り組む団体（Social History of Learning Disabilities =SHLD）にコミットすることができた。SHLD では毎年、国内外からインクルーシブリサーチに取り組む当事者や研究者が集まる会議を行っているが、この会議に参加することでインクルーシブリサーチの本質を少しずつ学ぶことができた。また、インクルーシブリサーチの第一人者であるジャン・ウォームズリー（Jan Walmsley）氏を招へいし、日本国内のインクルーシブリサーチに関心を持つ人たちとのつながりを作ることができた。さらに、日英の研究交流を目的とする ESRC の研究資金を獲得し、2018-2019 年に交流プロジェクトを実施することができ、今後の国際共同研究の基盤を作ることができた。

エピソード記述の方法論に関する検討

質的研究の多様な方法論への関心から、エピソード記述について学ぶ勉強会等の企画に招かれたり、エピソード記述を用いた研究論文に対する指導やアドバイスを求められたりすることが年間数件ずつある。また、2017 年には日本社会福祉学会の特定課題セッションにおいて、エピソードを用いた研究に関心のある学会と議論する場をもつことができた。これらの機会をとおして、社会福祉領域に限らず多様な分野におけるエピソードをもちいた研究の具体的な方法や可能性について検討することができた。

以上の研究をとおして、最終的には、知的障害のある人の自立、とりわけ重い障害のある人の自立についてはその人を取り巻くマイクロレベルでの関係性だけでなく、より広い意味での社会の構造のなかでの関係性を考察していく必要があると考えた。そして、個人の自立のプロセスをこのように多面的にとらえるのであれば、「自立」という言葉にこだわり続けるよりも、「インクルージョン」やそれに関連する概念を用いたほうが良いのではないかと考えるようになった。この最終的な考察のまとめは、今後論文等の形で発表する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 森口弘美	4. 巻 138号
2. 論文標題 「人々とともに」を実践するソーシャルワーク インクルーシブリサーチの試みをとおして	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会福祉研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 森口弘美	4. 巻 21巻1号
2. 論文標題 インクルーシブリサーチから見えてきたこと：対象者を探すのではなく、興味をもつ人と協働する（特集「インクルーシブなアプローチ」のこれから）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福祉のまちづくり研究	6. 最初と最後の頁 36-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小山聡子	4. 巻 58
2. 論文標題 質的研究方法において研究者が自己を語ることの意味と位置 授業研究を通して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会福祉（日本女子大学社会福祉学科）	6. 最初と最後の頁 69-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 谷美奈	4. 巻 11
2. 論文標題 表現教育の可能性 『STEM+ARTが求められる時代に』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 成城大学共通教育論集	6. 最初と最後の頁 161-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田啓子	4. 巻 21巻1号
2. 論文標題 目の前の当事者に「向き合うこと」からインクルージョンへ (特集「インクルーシブなアプローチ」のこれから)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福祉のまちづくり研究	6. 最初と最後の頁 44-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森口弘美・井口高志・太田啓子・松本理沙	4. 巻 123
2. 論文標題 調査活動「みんなが行きたくなくなるカフェってどんなカフェ？」 インクルーシブリサーチの観点からの検討	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 評論・社会科学	6. 最初と最後の頁 83-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井口高志・森口弘美・太田啓子・阪東俊忠	4. 巻 13
2. 論文標題 障害者と大学生との協働ワークショップが家庭科教育に提起するもの	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教育システム研究 (奈良女子大学教育システム研究開発センター)	6. 最初と最後の頁 295-307
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平本毅・谷美奈・川島理恵	4. 巻 9
2. 論文標題 基幹論文 立場を異にする者同士のかかわりの質的記述	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 質的心理学フォーラム	6. 最初と最後の頁 4-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本理沙	4. 巻 119
2. 論文標題 重度知的障害者のきょうだい関係におけるケアとセクシュアリティ ある女性きょうだいのエピソード記述を通して	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 評論・社会科学	6. 最初と最後の頁 127-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 森口弘美
2. 発表標題 How can families and self-advocates work together in Japan?
3. 学会等名 Social History of Learning Disability Conference 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森口弘美、太田啓子
2. 発表標題 知的障害のある人とつくる合理的配慮研修 Social Relationの観点からの検討
3. 学会等名 日本福祉のまちづくり学会第21回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 笠原広一、森口弘美、小室明久
2. 発表標題 ワークショップ「人とアートにかかわる実践を、生きる・書く・探究する エピソードで体験を省察するワークショップ」
3. 学会等名 アートミーツケア学会2018年度大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森口弘美、太田啓子
2. 発表標題 知的障害者の「関係性の変容としての自立」の検討 - SCATによる関連要因の抽出から、「仕掛け」の提示へ -
3. 学会等名 関西社会福祉学会年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森口弘美・小山聡子・笹倉千佳弘・引土絵未
2. 発表標題 特定課題セッション「社会福祉研究・教育においてエピソードを用いる可能性と課題」
3. 学会等名 日本社会福祉学会第65回秋季大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 本間直樹・谷美奈・森口弘美
2. 発表標題 インクルーシブリサーチワークショップ「僕は0歳のときから自動販売機が好きでした」
3. 学会等名 アートミーツケア学会2017年度大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森口弘美
2. 発表標題 「障害者の自立と支援 その実現に向けて」
3. 学会等名 パネルディスカッション「相模原障害者殺傷事件から問い直す“社会”と“福祉”」日本社会福祉学会中部ブロック部会2017年度春の研究例会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 平本毅・谷美奈
2. 発表標題 『質的心理学フォーラム』編集委員会企画シンポジウム「立場を異にする者同士のかかわりの質的研究～地域の居場所と「立場を異にする者」同士の交流～」
3. 学会等名 日本質的心理学会第14回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森口弘美
2. 発表標題 知的障害のある人たちと取り組むまちづくり協働研究の試み
3. 学会等名 日本福祉のまちづくり学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>ケアを考えるネットワーク http://caringsociety.net/</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	市瀬 晶子 (Ichinose Akiko) (50632361)	関西学院大学・人間福祉学部・講師 (34504)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	太田 啓子 (Ota Keiko)	立命館大学・衣笠総合研究機構・客員研究員	
研究協力者	松本 理沙 (Matsumoto Risa)	金沢大学・金沢大学先端科学・社会共創推進機構・博士研究員	
連携研究者	小山 聡子 (Oyama Satoko) (70287803)	日本女子大学・人間社会学部・教授 (32670)	
連携研究者	種橋 征子 (Tanehashi Seiko) (00760729)	長崎国際大学・人間社会学部・講師 (37303)	
連携研究者	井口 高志 (Iguchi Takashi) (40432025)	東京大学大学院・人文社会系研究科・准教授 (12601)	
連携研究者	谷 美奈 (Tani Mina) (60582129)	帝塚山大学・全学教育開発センター・准教授 (34601)	